うつふ

VOL.
0

SONI
SUMMIT

うつふ

VOL.
0

SONI
SUMMIT

SONI SUMMIT
曽爾村役場企画課　TEL　0745-94-2116
kikaku@vill.soni.lg.jp

曽爾村からの便り　冬

short story

早朝。
まだ昇りはじめたばかりの日の光が、建具に貼られた障子紙を通して畳の部屋をやわらかく照らしている。
外を覗くと家のまわりには畑が広がっている。土から顔を出しているのは白菜や大根の葉だ。それを囲む土の表面は、朝日を空に返すかのようにキラキラと白く輝いて見える。霜が下りているのだ。

昨夜も気温はマイナスだった。曽爾の冬は厳しい。
それでも田んぼや畑の中でうごめく土の細胞は、エネルギーを蓄えながら春を待っているように感じる。曽爾の野菜や米がおいしく育つのは、この厳しい寒さがあってこそなのだろう。

山に棲む動物たちはどうしているのだろうか。
暖かくなると畑の作物を荒らしにくる獣たちも、冬の間はその姿をほとんど見せない。彼らもまた春に備えてエネルギーを蓄えているのかもしれない。

私の住んでいるこの民家は、私が生まれるよりもずっと前に建てられたものだ。数年前に縁があってこの家に出会い、少しずつ改修しながら暮らしている。
多少の隙間風が入るものの、想像していたよりも暖かくて驚いた。長い年月を感じさせる柱や梁の木目はずっと見ていても飽きることがない。畳の香りも心地良い。マンション暮らしが長かった私には新鮮な住まいである。

明日は曽爾高原の“山焼き”が行われる予定だ。高原のススキを守るために、人の手で毎年野原を一面焼くという。
近年は観光スポットとして知られる曽爾高原だが、もともとは茅葺き屋根の材料であるススキを地域の人たちが集めていた「茅場」だったのだと聞いた。茅葺き屋根の家が減ってしまった今でも、人の手によって高原が守り続けられている。
私も山焼きに初めて参加してみるつもりだ。
ここで暮らしてきた人びとの想いを受け取ることができるかもしれない。

ふつう

中野 展宏さん
畑のあかり（トマト農家）
（居住6年目）

しごと

Summit▼　中野さんは地域おこし協力隊として未経験から農業の分野に入り、3年間の修行を経た後、独立してトマト農家を続けておられますね。どうして農家を目指そうと思われたのですか？

中野▼　前職は大阪の銀行で営業の仕事をしていたのですが、資産活用の提案に携わる中で、政権交代とともに為替相場の大きな変動を経験し、アパートなどの建設の裏で農地が減っていくのを見ました。政治体制などの変化でお金やモノの価値は簡単に変わることを知り、農地が減る中、食料自給率が低く輸入に頼る日本の将来はどうなるのだろうという疑問を持ちました。
一方で、お客様から家庭菜園で採れた野菜を使ったごはんをいただく機会があり、とても豊かな食事だと感じました。営業の仕事を通して、土地のあり方やこれからの生き方を考えるようになり、農業という選択肢にたどり着きました。その入り口を探す中で出会ったのが曽爾村の地域おこし協力隊の募集です。

Summit▼　農業の中でもトマトを選んだのはなぜですか？

中野▼　当時の募集はトマトかほうれん草いずれかの選択肢で、直感的にトマトを選択しました。曽爾村のトマトは3月に種をまき、7月から11月までが収穫期で、冬場は片付けや翌年の準備というサイクルです。僕は冬の期間を利用して興味のある仕事に出稼ぎに行ったり、他の農家さんに会いに行く旅に出たりしています。トマトは一年一作のリスクがあると言われますが、季節ごとに分けて考えられるのは魅力です。今思うと、最初にトマトを選んだのも自分らしく生きるために必然的な流れだったのかなと感じてます。

Summit▼　季節に応じて自分のやりたいことに挑戦できる働き方は魅力ですね。農家としてどんなときに仕事のやりがいを感じますか？

中野▼　健康的で美味しいトマトができた時や売上をいただけた時はもちろんですが、トマトを通じて、人間関係が広がっていったり、誰かにポジティブな影響を与えられた時にやりがいを感じます。トマトの発送の際には必ず手書きの手紙を添えていて、嬉しいお返事がもらえたり、知らぬ間に人の心を救えることができていたり。いかに心に響くことを届けていけるかが、僕自身が農家として存在する意義なのかなと感じています。

これから

Summit▼　曽爾村でこれから期待することなどはありますか？

中野▼　曽爾村での暮らしは本質的な学びが多いです。不便だからこそ感じられる豊かさがあり、高齢化の進む村だからこそ昔の知恵に溢れています。自分だけでできないことも、近所の誰かが得意だったりして、地域内で持ちつ持たれつの良さが引き継がれています。そういう本質的な“ふつう”の暮らしが紡がれ続ける村であって欲しいです。

Summit▼　トマト農家として今後やりたいことや目標を教えてください。

中野▼　まずは自分がしっかりと農業を続けて行くこと。そして、かつてのように曽爾村がトマトの産地として賑わっていくこと。トマト農家は、農業の中でも、生き方の多様性が生まれやすいと思います。その人ならではの副業やスキルを組み合わせて、”トマト＋〇〇“という人たちで産地が構成されていくと面白いと思います。担い手を増やしていくためにも、僕自身が研修生を受け入れられる農家に早くなれるように頑張っていきたいです。

暮らし

Summit▼　曽爾村に移り住んで、生活面ではどのようなことを感じましたか？

中野▼　自分でできることを増やさないといけないなと早い段階で感じました。実は初めての一人暮らしが曽爾村だったんです。曽爾村には小さな商店が数店あるだけで、コンビニやスーパーはないので、自炊する習慣もつき、そこそこの生活力が身についたと思います。初めての一人暮らしが都市部だったら、きっと便利の渦に飲み込まれてました（笑）

Summit▼　中野さんはもともと空き家だった家を改修して住まわれていますね。

中野▼　曽爾では何度か引越しをして、今住んでいるのは築40年の家です。その前は築90年ほどの、かまどや薪風呂付きの家に住んでいました。生活、修繕、何をするにも自分の手作業が必要で、暮らしの価値観や概念がガラッと変わりました。生きていくために本当に必要なものや不要なもの、背伸びして無理していることなど、あらゆることに気づきました。

〈PROFILE〉
中野展宏　NOBUHIRO NAKANO
大阪府堺市生まれ。銀行勤務を経て、地域おこし協力隊として曽爾村へ移る。トマト農家として3年間の修行を経た後、2019年に「畑のあかり」の屋号で独立。移動映画館「曽爾シネマ」を主宰するなど、さまざまな世代の人が交流できる地域の場作りにも力を入れている。
instagram→@hatakenoakari

ふつう

前川郁子さん
カフェねころん/ねころん書店　店主
（居住10年目）

〈PROFILE〉
前川郁子　IKUKO MAEKAWA
金沢市生まれ。ライターのご主人とともに奈良市に8年間住んだ後、2010年に曽爾村に移住、４年後にカフェねころんをオープン。2019年からはカフェの中に「ねころん書店」も開設し、村で唯一の小さな本屋を営む。
Instagram→@cafe_necoron_bookstore

暮らし

Summit▼　曽爾村へ移り住んだ経緯を簡単に教えてください。

前川▼　曽爾を選んだのは、実はたまたまなんです。主人の祖母が曽爾に住んでいたので地名を知っていたのと、隣の名張市に主人の実家もあるので近くて利便がよかったというだけで…。深い理由がなくてすみません(笑)。

Summit▼　前川さんは曽爾に来られて10年になりますが、改めて生活で大変だと感じることはありますか？

前川▼　やっぱり街で暮らすよりもお金がかかりますね。たとえば公共の交通機関が少ないので車は1人1台必要だったり、出合い(＝地区ごとに行われる草刈りや清掃活動)のために草刈り機も買わないといけなかったり。住宅まわりの手入れにかかる出費も多いです。あと内費(自治会費)の徴収もあります。

Summit▼　曽爾ではスタッドレスタイヤも必須なので車関係の出費は大きいですよね。近所の方々とのお付き合いで意識されていることなどはありますか？

前川▼　田舎だからといって特別に意識するようなことはなくて、街中で引越しするときと同じ感覚です。最初にきちんと挨拶をして顔を覚えてもらうことから始めて、地域行事などにも参加しています。ただ、田舎ではあらゆる場面でルールが曖昧なことが多いので、地域での役割の中で自分ができる事とできない事の線引きをしておかないと後々困ってしまうこともあります。地区のお祭りやお葬式など、自分がどこまで踏み込んで関わっていくかというのはあらかじめ考えておいた方がいいと思います。

Summit▼　曽爾では近所の人から野菜をいただくことも多くて、まるで家族のように接してもらえる嬉しさがありますが、その一方で気を遣わなければいけないことも多いですよね。

前川▼　街での生活とは違って、プライバシーが守られない場面が多々あります(笑)。没交渉ではやっていけないので、その覚悟は必要だと思いますね。

Summit▼　曽爾村で暮らしていてよかったと思うことはありますか？

前川▼　アクセスのよさは利点だと思います。大阪まで日帰りも可能だし、三重に隣接しているので名古屋や東京方面にも出やすいです。鮎釣りが好きなので、和歌山や吉野へ気軽に行けるようになって嬉しいですね。

しごと

Summit▼　曽爾でお店を営まれていると、地元の人だけでなく観光客と関わることも多いと思いますが、お仕事の中ではどんなことを感じていますか？

前川▼　お店をオープンしたばかりの頃は今よりもお客さんの数が少なかったので、来てくれた人とゆっくり会話する余裕がありました。村内に住んでいる方が立ち寄ってくれることも多かったですね。最近はネットやSNSをきっかけに来られる方が増えてきて、とてもありがたいことなのですが、私一人でやっている小さな店なので対応しきれずにもお断りしなければならないこともあって…。正直なところ、もっとゆっくりお客さんと向き合いたいというもどかしさがあります。

Summit▼　人が増えるほど対話の時間は減ってしまう。バランスが難しいですね。

前川▼　観光で来られるお客さんが増えたので、以前のようにリピーターのお客さんとじっくり関係を築いていくような時間は少なくなりました。お店を始めた頃にイメージしていた理想のかたちとは変わってきていますね。でも、お店って本来変わっていくものだと思うので、無理やりどうにかしようとかも思っていなくて。もともと〝田舎らしさ〟とか〝丁寧な暮らし〟みたいなものにこだわりがあるわけではないし、普通でいいと思っています

これから

Summit▼　曽爾村で改善した方がいいと思うことや今後の希望などはありますか？

前川▼　Uターンに対する支援が増えるといいなと思います。今、村の支援制度はどちらかといえば村外からの移住に力を入れているようですが、曽爾で生まれ育った人が進学などで村を出てしまうことが多い中で、また地元に戻りたいという気持ちを後押しできるような仕組みがあるといいなって。
たとえば移住した立場である私たちが地域の人になにか相談するとき、地元の人は年上の世代ばかりなんですよね。だから曽爾出身の同世代の人が近くにいてくれたら嬉しいです。村内で進めている新しい取り組みも、地元の人たちと一緒に動かしていけるといいですよね。

ふつう

林 宙さん
曽爾村森林組合職員
（居住6年目）

〈PROFILE〉
林 宙　HIROSHI HAYASHI
東京都世田谷区生まれ。自然素材の建材メーカーにて営業職を経験した後、2016年に地域おこし協力隊として曽爾村森林組合に入る。任期終了後は組合職員として多岐にわたる業務を担当しながら、情報発信など林業の魅力を伝える活動にも力を入れている。
Instagram→@lynechu

しごと

Summit▼　森林組合でのお仕事内容を教えてください。

林▼　林業に関することはほとんどやっています。たとえば村内の林業家の人たちにお願いする仕事を整理したり、山の所有者と交渉して事業の計画を組んだりといった事業全体に関わることもあれば、自分自身が山に入って作業をすることもあります。原木市の準備や運営もやっていて、僕はそこで”振り子“というセリの仕切り役もやっています。

Summit▼　林さんは地域おこし協力隊として森林組合に入り、そのまま職員として働いていますね。村外から来た立場で村の林業の中心となる仕事を任されているのはすごいことですね。

林▼　いま曽爾村森林組合で職員として採用されて働いている人はみんな村外から来た人ばかりです。組合は林業の全体に関わることができるし、仕事内容はサラリーマンに近いところがあって、移住してきた人でも入りやすい職場だと思います。行政と関わる事業を扱うので責任は大きいですが、山の木が生き続ける限りはこれからもずっと続いていく仕事なので、次の世代に繋げていく気持ちでやっています。

Summit▼　地元の人たちからも信頼されているということなのでしょうね。もともと森林組合での仕事を希望されていたんですか？

林▼　もともと山の仕事をしたいという気持ちはあったのですが、森林組合のことは曽爾に来るまでよく知りませんでした。前職を辞めてから山に関わる仕事をいろいろ調べていて、たまたま見つけたのが曽爾の地域おこし協力隊の募集でした。はじめは自伐型林業の担い手という枠だったんですけど、採用が決まってから森林組合に入ることになりました。組合の仕事は頭も体も両方使うので自分には向いていると思っています。

Summit▼　山の仕事がしたかったのは何かきっかけがあったんですか？

林▼　小さい頃から環境問題や野生の生き物に興味があって。でも自分が育った町にはそういう生き物があまりいなかったんですね。それで、もっと本物を見たい、本物がいる環境を守りたいと思っていました。あと、スノーボードをずっとやっていて、日本で雪が降り続けて欲しいという山への想いもあって。今はサーフィンも好きなので海の環境を守るために山の環境を守りたいという気持ちもあります。

暮らし

Summit▼　曽爾で暮らし始めてから5年程経ちますが、印象はどうですか？

林▼　よく地元の人から「田舎慣れた？」って聞かれるんですけど、そもそも田舎と都会の違いって何なんだろうって思うんですよね。たとえば今はあちこちにコンビニがあるのが当たり前だけど、よく考えたら自分が小さかった頃だって、そんなに近所になかったし、そう考えたらもとの状況にただ戻っただけなので、別に不便だとは思わないです。しいて言えば、夜に外食できる店が近くにないのがちょっと困るかな、というくらいですね。

Summit▼　確かに、私たちも曽爾で暮らしていて不便だと感じたことはないです。

林▼　あと、「田舎は遊ぶとこ無いやろ」って言われるけど、そんなことないですよ。街で暮らしていた頃よりも海や山に行きやすくなったし、時間のゆとりがうまれたこともあって、スノーボードやサーフィンを前より楽しんでます。
ここにいると自分と似たような価値観の人が自然と集まってくる感じなんですよね。ご近所さんとの関係も、同じ村に住んでいるから共通の話題や習慣があるし、世代の離れている人とも普通に話せます。自分の場合は仕事でも地域の人とがっつり関わるので、しゃべり方も曽爾の人に近くなってると思います。

これから

Summit▼　林業に関わる立場として、これから目指していきたいことなどはありますか？

林▼　いまの小さい子どもたちが大人になった時に、林業に関わりたいと思ってもらえるようにしたいです。単純に「かっこいい」とか理由は何でもいいから、憧れる職業の一つとして林業という選択肢があたりまえにあるようになってほしい。
そのために小さなきっかけをたくさん作っていけたらいいなと思います。例えばこの辺りだと伐採した木をたくさん積んだトラックがよく走っていますよね。それを見た子どもが「あれなに？」って聞くところからも興味ってうまれると思うんです。そういうきっかけから始めていきたいですね。

ふつう

山本雅彦さん
陶芸家
（居住4年目）

〈PROFILE〉
山本雅彦　MASAHIKO YAMAMOTO
奈良県高取町生まれ。アパレル専門学校、陶芸訓練校、弟子入りを経て、奈良に戻り独立。2017年に妻、子供2人とともに曽爾村に移り、工房がある自宅の一軒家を少しずつ改装しながら作陶し暮らす。
instagram→@masayama.kai

住まい

Summit▼　山本さんはもともと空き家だった民家を改修してご自宅兼工房として活用されていますね。この物件はどのようにして見つけたのですか？

山本▼　家を探していた際の条件として、仕事場や薪窯を設けられるということが必須でした。曽爾だけでなく他の地域も検討しながらあちこちで探していたら、たまたまここで条件に合いそうな物件が出て紹介してもらいました。だから自分で曽爾を選んだというよりは土地に導いてもらったような感覚で、曽爾が自分を呼んでくれた、ありがとう、と思ってます。

Summit▼　曽爾に来たのは偶然というか、土地との巡り合わせのようなものですね。

山本▼　そうですね。土地が持ってるパワーって絶対にあると思っていて。たとえば、自分もそうだったんですけど、移住したいと思ったらまずどんな所に住みたいとか、理想の場所や条件を考えますよね。でも気に入った場所があっても仕事場が作れなかったり、窯を作る適した場所ではなかったり、条件が合わなかったりでその土地に選んでもらえない事もありました。だから場所の力に身を委ねて、辿り着いた場所で「来るべくして来た」と思えたら幸せですよね。

しごと

Summit▼　陶芸家としてお仕事をされていますが、曽爾村の環境をどのように感じていますか？

山本▼　自分がやっている仕事って、自分自身と向き合うことなんです。その拠点がたまたまここにあるだけ。そういう意味では仕事をする上で曽爾村を意識することは無いです。でも、ものづくりの環境として考えたらやっぱり恵まれてると思います。街に比べたら静かで、周囲の景色も違うので。見てる景色が変わると必然的につくるものも変わってきます。

Summit▼　環境が心身に与える影響は大きいですよね。自然に囲まれていると視覚だけでなく匂いや音などにも反応して五感が敏感になっていく気がします。

山本▼　自然は恵みを与えてくれる時もあれば、災害のように全てを奪われることもある。そういう美しさも残酷さも含めて、ここにあるものは全部ほんものだと実感できます。何が起こるかわからない状況やからこそ、それに対応して良い方向に持っていこうとする気持ちがある人なら、ここでの暮らしを楽しめると思います。

子育て

Summit▼　山本さんは2人のお子さんもいますが、曽爾での子育てについてはどのように感じていますか？

山本▼　子どもを育てる環境としては都会も田舎もそれぞれの良さがあるので、どちらが良いとは言えないです。ただ、最初から街の便利な環境で過ごすよりも、小さいうちは田舎で過ごして、歳を重ねるにつれて街の便利さを知っていく方が、それぞれの良さが実感できると思います。

Summit▼　曽爾ではお子さんとどのように過ごすことが多いですか？

山本▼　一緒に山へ散歩に行きます。おじぞうさんに手を合わせたり、近所の春日神社にお参りしたり。自分たちが山粕（地区）の中で一番お参りしてる回数多いと思う（笑）。子どもたちが葉っぱや虫を見つけて来て、それがまたおもしろかったり、ええかたちしてたりね。仕事をする上でも自然の中を散歩することはすごく重要で、良い意味でリセットにもなるし、自分の状態をキープするには欠かせないですね。

Summit▼　山を散歩することによって、お子さんにも山本さん自身にも良い影響が与えられているのですね。曽爾で子育てする上で不安なことはありませんか？

山本▼　不安は…ないかな。環境面で不安なことは特にないです。あるとすれば、子どもと接していても仕事のことが頭にあるので、自分と向き合っているようなところがあり、父親としての自分というものを考えることはあります。

これから

Summit▼　今後曽爾で期待することなどがあれば教えてください。

山本▼　曽爾は芸術やものづくりの仕事をしてる人が今は少ないので、今後はそういう人が集まってきたらもっとおもしろくなると思います。